

ケーションツールの試みがなされており、発表者は自分のポスターを訪れてくれた人に連絡先と発表要旨の印刷された名刺のようなカードを持ち帰ってもらうことができた。私も聞きにきてくれた方々にはもれなくカードを渡し、訪れた先でも交換した。これは、研究者同士の交流には勿論、特にジョブハンティング中の研究者にとって大変便利な方法だと思う。

会議全体としてはヨーロッパ的なゆったりした空気は流れながらも、参加者には自身の興味の対象について精力的に情報収集しようという真摯な姿勢が感じられる素晴らしい

第17回欧州生体エネルギー会議（17th European Bioenergetics Conference）に参加して

京都大学大学院農学研究科 村井正俊

2012年9月15～20日まで、ドイツ・フライブルクで開催された第17回欧州生体エネルギー会議（17th European Bioenergetics Conference, EBEC 2012）に参加しました。2年毎に開催される EBEC は、細胞のエネルギー代謝研究全般をカバーする学会であり、ヨーロッパ各国はもとより、日本やアメリカからも多数の研究者や学生が参加します（ただし、日本人は少数派）。会場となるフライブルク大学（Albert-Ludwigs-Universität Freiburg）は、フライブルク市内の中心部に位置する総合大学で、古いヨーロッパの町並の中に大学の建物が何の違和感もなく立ち並ぶ姿は本当に見事でした。町と大学が壁もなく一体化しているのは、ヨーロッパの大学の典型的なスタイルらしいのですが…

さて、本会議のキーワードである「生体エネルギー（Bio-

いものだった。さらにニースというロケーションも私には幸運だった。私にとっては初めての海外発表、かつ一人で海外に滞在するのも初めてという初めてづくして、会議中はかなり緊張していたが、終了後の一日に周辺を散策するだけでも雰囲気のある町並みや紺碧の地中海を十分楽しめた。

最後になりましたが、本国際会議への出席にあたりご支援くださいました財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、お礼申し上げます。

energetics）」とは、ATP 合成酵素や NADH 脱水素酵素など、ミトコンドリアやバクテリア細胞膜上に存在する各種エネルギー変換酵素（酸化還元酵素）やトランスポーターの基礎研究から、ミトコンドリアタンパク質が関与する疾患の医学的研究までをカバーする学問領域です。これらのトピックに関して最新の研究発表・討論が6日間に亘って行われました。討論の形式は、トピック毎に Plenary Lecture, Symposium, Poster Session の3つに分かれ、午前中は専門分野に関わらず参加者全員が討論に参加する形式の Plenary Lecture が行われ、午後からはそれぞれのセッションに分かれての Symposium および Poster Session が行われます。

今回私は、3日目の“NADH oxidase”のセッションで、「Characterization of the inhibitor binding site in NADH-ubiquinone oxidoreductase using fenpyroximate analogues」とのタイトルで、ミトコンドリア NADH-ユビキノン酸化還元酵素（複合体-I）の阻害剤の作用機構に関する口頭発表を行う機会を頂きました。流暢とは言い難い私の英語力にも関わらず、発表後の休憩時間やその後のポス



写真1 トランが縦横無尽に走るフライブルクの町並み。



写真2 会場のフライブルク大学。



写真3 会場内の様子（ポスター会場を中心に講義室が配置されている）。

ターセッション、さらにはバンケットでも多くの参加者から質問やコメント頂いたことを非常に嬉しく思いました。私自身、EBECへの参加はこれで3回目ですが、本会議は参加者数400人程度の比較的中規模の国際学会であり、常連の参加者も多く、スケジュールも非常に緩やかです。特に、2時間毎に設定された30分のティータイムでは、各自のポスターを話題にして、様々なバックグラウンドの方と話が出来ます。参加する度に知り合いが増えしていく充実感はなかなかのものです！

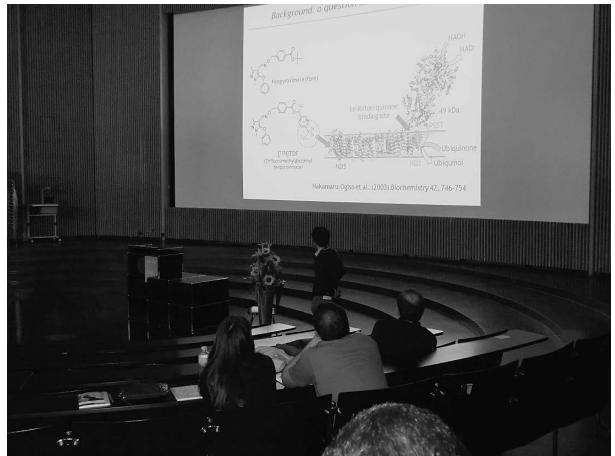


写真4 講演の様子（中央が報告者）。

このように、非常に濃密で（アットホームな？）素晴らしいEBECなのですが、日本を含むアジア地域からの参加者はまだまだ少数派です。次回のEBECは、2014年8月にポルトガル・リスボンにて開催予定ですが、自身の研究が「生体エネルギー研究」に該当すると思われる方、「生体エネルギー」というキーワード自体に興味のある方は是非とも参加されて、その面白さ、奥深さを味わって頂ければと思います。最後になりましたが、国際学会参加にあたり援助を賜りました財団法人農芸化学研究奨励会に心より感謝申し上げます。